

# あを 11

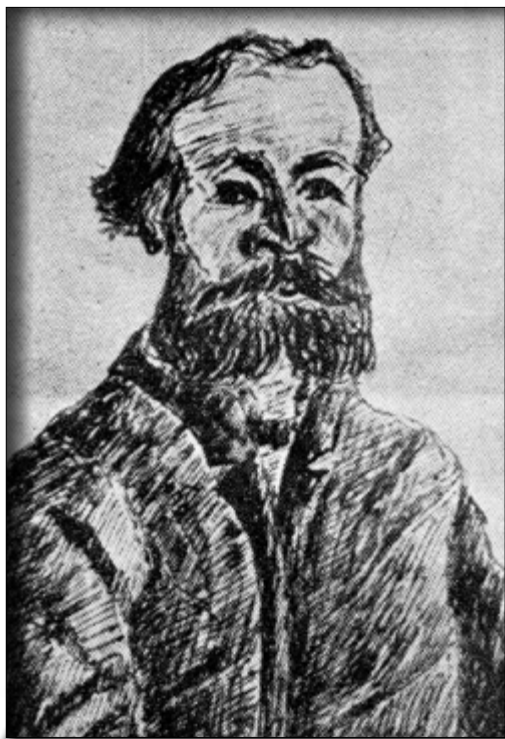
2013



練馬・長命寺

私には自然のほかに師匠はなかった

ルソー



Rousseau

ルソー

自画像

ファブリ世界名画集

平凡社版より

# あそ

十一月

あかんぼが

佐藤 喜孝

あかんぼが河馬のとなりで三尺寝

フラミンゴにかはるつもりの揚羽蝶

猫ときにをさな顔せり扇風機

揉んでゐて水匂ひだす葉月かな

戦争で明るい地球水中花

うしむまとひとのぬぬ畑灼けてをり

蟋蟀の貌がどんどん大きくなる



秋の半日だけ、もう少しで二歳になる孫を預ることになった。預る私たち夫婦は何の不安もないのだが親の方が心配でたまらないらしい。おしゃべりがまだ十分ではないので「○○ちゃん辞書」を作ってきた。

バー	バナナ
ブドー	ぶどう
ウドー（口をとがらせて）	うどん
トー	機関車トーマス
アーパンチ	アンパンマン
ジュー（ゼー）	ゼリー
ギューギュー（ウーウー）	牛乳
ポッポ	汽車・電車
コッコー（コロコロ）	ボール
マントー	コート・ジャンパー
カッカー	踏切
ネンネー	寝たい

親子ですぐ忘れてしまふかもしれない事柄なのでここに書留めてみた。

☆

井上石動

山祇よ満々木の実降らしめよ  
はつらつと魔女は逝きたり体育の日  
うたた寝の黒塚の婆草もみづる  
ななかまど小屋はしたくを始めけり  
小春日の小枝離るゝ柿葉かな  
芭蕉忌の浪花時雨と打たれけり  
奥庭の波目すがしや夢窓の忌

☆

大日向幸江

韋駄天の台風最中夜の電話  
巡回のナースと入りし秋の蠅  
二百二十日鴉の見張るごみ置場  
コスモスの地上にありて星のごと  
三つ星の若きパティシエ秋麗  
甦る遊びに影踏み月の夜  
十五夜を賢治の夜鷹飛びつづけ



とき・ば・もの  
ネットで「アマゾン」なる古本屋さんを知り、ガゼン利用させてもらっている。なにしろ「安い・綺麗・丁寧」な本が届く。送ってくださる相手を想うと、感動の涙。玉にキズは、@250円の送料付加。で、「蛙はなぜ古池に飛びこんだか 著・李 御寧」を読んだ。  
以前、「古池に蛙は飛びこんだか 長谷川 耀」を読んでいたので、二冊の差異も面白かった。李さん曰く、「一句を具象的・臨場感たらしめるためには「時・場・物」とか。もちろん一句の裏に「人」が登場すれば、なお佳とか。  
で、私は考えた。時…季語でまかなえるが、秋の声…では、漠然とし過ぎ。もっと「期間限定」季語を。  
場…舞台設定。読者が具体的に連想できる舞台がいいのだ。物…湘子が言っていた。「一句にブツだけ出せばいい。他は要らん。やい、ブツを出せ！これじゃあ強盗だね・・・」と。  
で、我が駄句群を閲してみた。 嘩然、慄然、愕然、トホホ・・・ みなさんも、おりあらば「とき・ば・もの」の呪文でチェックしたらいかがでしょうか。

新 秋 木村茂登子

夏終る重き荷おろしたるおもひ

新秋の教会の鐘寺の鐘

台風圏近づくマツチ探しをり

穂芒のハラリと解けて風まかせ

泣けるだけ泣いてしまった彼岸花

鱗雲まだ捨てきれぬものばかり

影もゆれはかなげが良し秋草は

初 秋 篠田純子

にぼどりの浮かんでこない昼の虫

昼顔の最後のひとつ日の暮るる

ビクツとして硝煙にほふ運動会

秋の雲インドカレー屋開店す

緑青浮く書畫骨董屋木ノ実落つ

虎ノ門金比羅宮大祭 二句

舞ふ巫子のゆるる挿頭<sup>かざし</sup>や菊薫る

里神楽すったたーん<sup>と</sup>と見得切れり

今年の夏の暑さはかくべつであった。

毎日青息吐息の状態にありながら他に気がかりなことがあった。

庭隅の枝を払って幹も一米位の所で伐採してもらった木のことである「ここまで切ると枯れるかもしれない」と言ったKさんの言葉である。

枝葉の余りの成長振りを持って余しつつこの木の勢いの良いのは私の元気の証かと思ったりもしていたので一本の棒切れみたいに白けて立っているのを見ると早続きのせいかと思いつつも少し不安になっていった。

しかし或る日伐り口近くに小さな緑の双葉が出ているのを見た後は続々と芽吹き出し、今はもう細い枝ながらいっぱい葉をつけて一米ほども伸びている。何と生命力の強い木かと嬉しく安堵するとともに少々あきれてもいる次第である。

仕事で虎ノ門へ自転車で行く道順は、丸の内中通りを経て第一生命（ここはGHOが撮取していたという）の前に行く。内田百間の文章にある。「つなぎが沢山出て来てビルの隙間に入って行く」という。日比谷の壕を過ぎ、公園に添って右折し祝田橋方向へむかう。愛宕下通りへ左折すると、日比谷公園の築山が見える。曼珠沙華が沢山咲く。もう咲き終わりの頃、道に一本だけ何時迄も咲いているのが在り嬉しい。道の右手には數茗荷の花が終わり漆黒の実が現れた。どこからか金木犀の香がほんのりと漂う。そろそろ榎植の実の事も気にしなければ……。

来年には、新橋から虎ノ門へ「環状第二号線」旧マツカーサー道路が開通する。ビルの下を道が走るとか。

水 栓

定梶じょう

鳴きやむと遠き蛸声を継ぐ

種茄子や身辺煩多なる少し

早退けをせしこと法師蟬聞けば

二つづつ律儀に葡萄種蔵す

えんまこほろぎ包丁がなまくらで

押しならび押しならび帰る前の燕

秋深みかも水栓の漏れを直し

☆

須賀敏子

秋暑しオリンピックが来るらしい

大小の秋茄子届く朝まだき

病癒へ秋には逢へるたよりあり

釣人に餌ねだりをり秋の鯉

ひっそりと秋の睡蓮池の端に

爽やかに舍人公園風渡る

仲秋の名月を観に突っ掛けで

たけなわである、という意の「深む」。秋深む、春深むなどと遣うが、歳時記では「深し」が主題で、昭和三十年頃迄の多くには「秋深む」などは採用されていない。

もともと古語では「深める」の意味でしか遣っていないわけだから、「秋深む」が「秋が深まる」の意では遣えなかった。いつ頃から遣えるようになったのだろう。

現代の国語辞典の殆どは「深まる」の意と共に「深める、の文語」等と「深む」を説明しているが、やや古い辞典、収録語数七十二万語の平凡社刊『大辞典』（昭和十一年頃の発行）には「深める」の意味しか載っていない。受験文法の信奉者達がまたぞろ「秋深む」の使用は誤り」なぞと言いださなければいいかと。

冬ふかむ父情のふかみゆくごとく

飯田龍太



豆腐汁

田中藤穂

集合は花合歓の下一人まだ

秋暑しどこまで洩るる汚染水

酷暑過ぐ夜半覚めてきく雨の音

死にもせず猛暑越えたる豆腐汁

生りすぎのゴーヤをもらふ風笑ふ

燃えざれば白は淋しや曼珠沙華

コスモスへ遠くより風到りたる

前号正誤

初花を届けにゆかむ酔芙蓉

草花

長崎桂子

秋桜やつと程良き朝と夕

つゆ草の色に衰へありにけり

鶏頭に触れて伯母様ふと浮かぶ

九十二の唱歌の声や生身魂

そよ吹くや川面の蜉蝣群れ交へ

つくつくし勝者の如く称へ合ふ

正に名月再三再四窓により

お祭

見せ物小屋の呼込の男は首に太い蛇を巻いて、「顔は人間、胴は〇〇、足は××の見せ物が見られるよ。」などと濁声を張上げているが、それはどうせまやかしたと思つて入つてみたことはない。一度姉と人形芝居の小屋に入ったら、「安達ヶ原の鬼婆」というのをやってしたが、子供心にも幼稚な人形でかつかりした。けれどもあの祭の夜の見せ物小屋の内と外に漂う異様な熱気は、あたりにうごめく浴衣の老若男女と共に深く心に染みついている。神社の大鳥居の横の細い道路一本へだてた小保田万太郎さんが住んでいて、このお祭の句も何句も詠んでおられるけれど、お祭の間はさぞ賑やかで落着かなかったことと思う。

台風の荒れた後の十月は蒸し暑い夏日が続き、又又大型台風26号は伊豆大島に甚大な被害をもたらした。悲しい気持がいつぱいで、言つべき言葉も見当たりません。

そして気温はがくと下り、初冬のような夜の冷込みがやって来た。二三日後二階のまどから 前の舗道のこんもりと茂った櫨の木を見ていたら、深い緑の中の所所に真赤に色付いた葉が五・六枝見えた。

今年の急に気温が上下に変化するのを繰返した日々でも、確実に紅葉の時季を忘れないで紅葉は始まっていたらしい。やがて澄んだ空気に、並木が真赤な紅葉を見せてくれるであらう日を待っています。



☆

早崎 泰江

台風一過歓喜のごとく蝶の飛ぶ

はやばやと枯色招く糸のこ草

廃屋に十五夜の月おしみなく

秋の夕吾が影を踏む楽しからず

釣人のまはりに遊ぶ通し鴨

葦の辺に瑠璃色ゆらす螢草

四阿の遠くに聞ゆ法師蟬

牛 蛙

森 理 和

落羽松内耳に宿る虫の聲

牛蛙空氣の漏るる秋の恋

墓参りのびのびひろぐ姫胡桃

崩れ初む草野にありて螢草

蒲の穂の根方の水の盛り上る

踏跡は駅へ近道飛蝗かな

熱中症くるりころころ団子虫



広々とした舎人公園での吟行は、  
緑のなだらかな丘、大きな池、草む  
ら、虫の声、囀り、上々のお天気に  
開放感、満たされた一日でした。

昼食はコンビニおむすびの梅とコ  
ンブに舌鼓。特別な味わいでした。

爽やかな公園を包む空氣が、日常  
をほんの少しだけ離れたここに、調  
味料となつて体内をも清められ、透  
明感に浸れました。

蒲の穂までは何度も目にしました  
が、穂綿は初めてです。因幡の素戔  
が過りました。ヌスビトハギに取り  
付かれた喜孝さん。ハギにしてみれ  
ば「しめしめ」でしょうか。植物の  
不思議の一端にも触れて、公園のガ  
イドブックや植物図鑑を重ねて反芻  
も、また楽しい一時です。



☆

吉弘恭子

がま池の落葉もいちど裕子と行こつ

八月や熟寝の子の頬真つ赤赤

蟻の穴ふえつづけたる十五日

原子炉と同じ雨浴び暑き日も

左右見て赤信号を渡る自転車

野面に二匹三匹すずめ殖ゆ

朝と夕面馴る道の木槿垣

舎人公園

赤座典子

木道の傍に色濃き蛍草

風の間穂絮つき初む蒲の原

秋の蝶訪へる残りの白詰草

掌に色無き風のやはらかし

台風接近中止となりし敬老会

誕生日髪すつきりと秋夕焼

水引の紅沿ふ黒き御影の碑



波郷の碑

生誕百年を記念して 石田波郷の句碑が建立された。波郷が療養の為二年間を過した病院の跡地に 縦一・五、横三メートルという立派な碑となった。「七夕竹惜命の文字隠れなし」と「遠く病めば銀河は長し清瀬村」の二句が刻まれている。

清瀬市はゆかりの地ということで、ここ数年石田波郷俳句大会を開催しており、市のホールで表彰式入賞作品の展示、講演等がある。

入賞句を ホールや市報で読むたびに 小学生の句の 素直な発見と感動には 驚くばかりである。

懐かしい新鮮さも享受出来、毎年とても楽しみである。

海底を兵隊さんが進む夏 佐藤喜孝

嬰兒の薄目開けたり秋日傘 赤座典子

雲切れて闇生まれけり鉦叩 井上石動

回遊魚数多の瞳星流る 大日向幸江

新盆や四肢たくましき胡瓜茄子 木村茂登子

えい儘よ昼寝しながらMRI 斉藤祐子

生身魂ふたり揃って入院す 篠田純子

ちぬ釣や夕波なつかしく寄する 定梶じょう

襖みな外して盆の客迎へ 須賀敏子

白障子開け放ったる木槿寺 田中藤穂

跳上り横に飛び散る喜雨来たり 長崎桂子

昼顔や酸素マスクの兄の顔森理和 森理和

木下闇といへど八月十五日は暑い 吉弘恭子

蟬時雨善正眞福善福寺 吉弘恭子



## 十月作品より

長崎桂子・佐藤喜孝

國生みの神に齟齬あり雲の峰

佐藤 喜孝

今年の夏の暑さはよく世間で言う「筆舌に尽くしがたい」の言葉通り異常な状態で例年より長く続きました。それを「神様の齟齬」と漢語の表現でおっしゃっていらつしやいます。(桂子)

嬰兒の薄目開けたり秋日傘

赤座 典子

「嬰兒」をあらためて辞書をめくつてみた。

「嬰兒は、本来は「緑児」と書くが、現在では「嬰兒」が一般的な表記になっている。古く、「みどりご」は「みどりこ」と末尾が清音であった。赤ん坊を「みどりご」「みどりこ」と呼ぶのは、大宝令で三歳以下の男児・女児を「緑」と称するといったのは、生れたばかりの子供は、新芽

らう、鉦叩が鳴いてゐる。明りにより、より暗の美しさが際だった。(喜孝)

回遊魚数多の瞳星流る

大日向幸江

鯉棲む星の光の届く海

十六年前『獐』に発表した幸枝(当時)さんの作品。作者の星には夢・希望などのことがばが浮ぶ。

水族館では鰯や鮪の回遊を見たことがある。この句の回遊魚も円筒の大水槽を泳いでゐる魚であらう。次々目の前を横切る魚の瞳が光ってゐる。作者はこの光に何を感じたのであらうか。とらはれの身の魚を思ひやる作者である。(喜孝)

秋の風糸のころ草のそのあたり

木村茂登子

曆に秋は立ちましたがそれからの真夏日は幾日もあり「気象観測が始まって以来」の言葉を今年は何回も聞きました。作者は「そのあたり」

や若葉のように生命力溢れていることから喩えられているのである。漢字の「嬰兒」の「嬰」の成り立ちは「貝」が首飾りを表し、首飾りをつけた女の子とする説と、えんえんとなく赤ん坊の泣き声を表す擬声語といった説がある。(語源由来辞典)

この句の嬰兒は新生児であらう。外出した嬰兒を、日傘で庇ひ何度も顔をのぞく。眠つてゐる。また見る。ふと薄目をあける。ただそれだけでうれしくなる。赤ん坊は元気の源である。(喜孝)

雲切れて闇生まれけり鉦叩

井上 石動

月を覆つてゐた雲が切れて月が現れた。本来なら月光で闇が消えるところだが、作者には逆に闇が生れるのが見えた。その闇の中でもあ

に秋の風を見付けたのです。

鋭い観察力です。(桂子)

新盆や四肢たくましき胡瓜茄子

木村茂登子

お盆には茄子や胡瓜を牛馬に喩へて供へる。

脚ひとつ失せてをかしき茄子の牛 鷹羽狩行

胡瓜の馬に跨りて来よ妹よ 鎌倉喜久恵

などと詠まれてゐる。この句は牛馬と云はずに書かれてゐる。「四肢たくましき」で迎へるものの心持がよく表されてゐる。

送り火や面影といふ消えぬもの

木村茂登子

も、ものを思はせる句である。(喜孝)

えい儘よ昼寝しながらMRI

斉藤 裕子

「目を移して、死んだものゝやうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。」と啄木は『歌のいろく』を締めくくつてゐる。私は今月の七句を読んではつとし

た。鞭打たれた。私も最近CTスキャンを受けた。少々落込んでゐたが裕子さんの警策で目が覚めた。

ベリベリと空を剥がすやはた神

八月や背を正し聞く癌宣告

秋立つや優先順位見えてきた

と、生き方が見事に作品として結実してゐる。作者の俳句はかなしいおもちゃではない。(喜孝)

井戸ポンプこいで濡らして首涼し

篠田純子

作者のお住まいには井戸が今でも残っていらつしやるのでしょうか、私は子供の頃井戸がありましたので、夏の井戸水の心地好さが蘇りました(桂子)。

生身魂ふたり揃って入院す

篠田純子

マイナス現象を悲観して表現するのも一法で

夏の季語ですがちぬのことより、この句を採りあげたのは「夕波なつかしく寄する」にです。なぜこの句に惹かれるのか、考へてみました。静かな海辺に立ついつも飽くことを知らず曳いては寄せる波に見入るのです。なぜ見入るのか、その答はきっと「夕波なつかしく寄する」のなつかしくではと気がつきました。なつかしくは使ひにくい詞とおもひますが、なつかしいものをなつしまぬところに魅力が生れます。序でといつてはなんですが「ちぬ釣」にも趣を感じてきました。(喜孝)

京にても京なつかしやほとときす 松尾芭蕉  
なつかしや未生以前の青風 寺田寅彦

夢に見れば死もなつかしや冬木風 富田木歩

提灯に家紋の浮いて盆の夜

須賀敏子

私の育った所は八月盆で軒を連ねる家々は盆提灯を下げて三日間を過す習慣でした。やっぱ

あるが、このやうに一捻りすることにより生きる視野が広がるやうだ。入院と云ふ事態に夫婦の片方のみか夫婦で入院。事情が変わるわけではないのだが、「ふたり揃って」と表はされると、きつと早期にふたり揃って退院しさうである。(喜孝)

危ふいぞ幹下りる途のかたつむり

定梶じょう

階段でも上りより下りる時に手摺につかまる様になつて来た此の頃です。作者は「落ちないかな、大丈夫かな」と不安で、優しい目で「かたつむり」を見守っています。(桂子)

ちぬ釣や夕波なつかしく寄する

定梶じょう

私、釣は全く不案内でちぬは舟で釣るのか、陸から釣るのかさへわかりません。ネットで教へてもらうと、陸釣が一般のやうです。ちぬは

り家紋は入っていました。懐かしく、父母の面影も浮かんで来ました。(桂子)

白障子開け放つたる木槿寺

田中藤穂

すべての障子を開け放す。広いお寺の夏の暑さの過ごし方で風が通り昼間でも涼しく快適に居れる本堂です。そこからはいろいろの種類の木槿が目癒してくれます。(桂子)

手に付かぬ事ばかりなり夕端居

森理和

日日の暮しは心の弾む事は少なく、気苦労や気のふさぐ事が多いです。そんな時は気が進まなくて何も出来ません。暫し休息の時を過し、ゆっくりと活路を見つけたいです。(桂子)

日の盛り十六切にする西瓜

吉弘恭子

暑くて賑やかで楽しそうな情景が浮かびます。西瓜を食べてから少しは暑さを忘れて、仕事や

# さぐれわす一郎

作業が続けられます。

わき水に水輪重なる万緑裡

吉弘 恭子

暑い最中歩いていて辺りは緑がいっぱい、そしてわき水に出会えたらどんなに嬉しいでしょう。わき水が水輪を次つぎ作る。水が溢れています。汗は消えて洗われた様に清しいです。

(桂子)

蟬時雨善正眞福善福寺

吉弘 恭子

東京の私の家の近辺では一夏に数度蟬が一匹訪ねてくることがあります。近所のお寺まで足を延せばその一角は蟬時雨と云っても詐欺ではないほどに聴くことができます。お寺は街のオアシスとなつてゐます。昔はこの墓域で虫捕に励み寺の人に追いかけれられ鉄条網を搔潜り逃げたものでした。掲句は「六本木」と題した

作品の一句です。今は東京の中でも一二を争ふ街になつた六本木。そのような街にも蟬時雨に遭ふことができる場所がある。名詞のみで構成された句は無味乾燥に思へますが、読者の中で再構築されるイメージは結構強いものです。

(喜孝)

白むくげ白無垢八月十五日

川崎展宏

寒卵神田鍛冶町乾物屋

内田しんじ

単帯只今気力捏造中

池田澄子



## こともあろうに冬園にくちづけす

東一の耳鼻科へ通っている。一度診察を受けたら、長い病名を告げられた。耳の中に石があつて石が動くたびに眩暈になるそうだ。目まい薬を二十日分もらつてきて飲んだが相変わらず。二回目は一と月、同じ薬を飲んでゐる。依然治まらない。近日、三度目の通院になるが先生は「生命に別状はない」と仰る。さて、地元の民生児童委員が地域の改正で私共牛込西部民児協から榎町地域へ一部の委員が分かれることになった。その、お別れ会が先日厚生年金会館で行われた。私も一言延べ前からの依頼で久し振りにハーモニカを吹くことになった。「故郷」「冬景色」「千の風になつて」次に十一月場所なので「相撲甚句」を、一くさり精一杯の頑張りである。

△二〇〇七・十一・二三△

## 年鑑は句のしかばねか秋ともし

俳句の静けさを取り戻したいが、ままならぬ日々が続く兔に角、身体に余裕が欲し。地域の行事も、この所目白押しで出番が続く。先日俳句仲間の「あを」の石森和子さんから、何時か吹いのが気に入つたらしく声が掛かつて十一月五日に石森さんのカフェ傳(中野区上高田)で小生のハーモニカを吹く会を開いてくれる。私を励ます会かも、容易く返事はしたもの、何としても素人芸。秋冬の童謡を中心に自在流で行くつもり。毎日、吹き易いように数字譜を書き直している。最後に高野辰之作「故郷」で締めくくる。聴かせたい曲・吹ける曲吹きたい曲と、一致しないのが難しい処。思うように行かぬは俳句と同じである。

△二〇一・十一・三△

## 獐回頭

高島茂 選評

わたくしの櫻を植ゑる雪の前

堀内一郎

今月の一郎さんの一連の作も、お母さんを亡くされた思いの深い作品となっている。線香に火を点ける。弟に家督を譲り、自分は家業に勤める。妻と並び、母なき後の空しさを押さえて生きる夫婦の有様が、せつせつと伝わってくる。雪の季節が近づく。母の眠る土に桜を植えている。何年かするとその桜が母のために咲いてくれるのであろう。私の桜を植ゑるには深い作者の思いがこもっている。

〱一九九一年十二月〱

小春日の地に空色の種を播く

斧田 綾子

初冬に播く種は、どんな種であらうか。この句はそれを言っていない。空気も澄んで小春日和の空は碧い。その色の種を地に播いているのである。空のいろも種のいろも薄みどりしているのであろう。空色の種とは、小春日和にもっともふさわしい色の種ではある。 〱一九九四年一月〱

膝を越す馴れぬ雪なりよろけつつ

長崎 桂子

幽霊の行列の見ゆ雪夜の庭

昨年の暮から例年にない大雪に見舞われた。作者の在住する三重でも、かつてない積雪が報じられた。普段、雪といっても、二、三糎。多くて七、八糎も積もれば雪が降ったと思うくらいの処である。作者にとって暮に降った雪は思いもよらない事態である。膝を越す雪に、雪掻きはもちろん、日常の生活にもえらい目にあわされた。いつも雪で悩まされている豪雪地帯に生活する人達に自然と思いが行く。大雪の降った夜の庭は、いま迄見たことのない、幻想的な風景である。樹木といわず塀から隣家の屋根、見えるものがすべて厚い雪に包まれた別世界である。作者はその夜に幽霊の行列を見たのである。それはきつと初めて体験する大雪の妖しいまでの光景に、情がうごかされてのことであらう。決してオーバーな表現ではない。作者にとってこの大雪は、幽霊の列を見せてくれた驚きでもあった。

〱一九九六年二月〱

新聞紙ひとひねりして刈田焼く

山田ノブエ

刈りとった後のまだ薫くずなどがちらばっている。それを集めて田始末するのである。薫ばっちなども燃やすのであろう。先ず火をつけるのに新聞紙を丸めてそれに火を付けた。「新聞紙ひとひねり」が上手い。

〱一九九六年一月〱



# 台風

長崎桂子

台風や歩道は川となりけり

台風や溝川悶え溢れたり

台風を準備万端して対ふ

雨音に樹樹揺すり合ふ台風裡

台風裡ラジオテレビに祈るのみ

台風の少し遠のき座を立てり

台風過舗道葉っぱの展示会

台風過新しき雲季醸す



## 葉鶏頭

斉藤裕子

熱帯夜虫も殺していいをんな

朝一の鳥の声も夏疲れ

めらめらと命燃やすや葉鶏頭

葉鶏頭本気でしたら捕まった

秋の雲尾鰭つくから黙つとこつ

悟らぬ方がいいと言ふ子よ秋の夜

泣ききって力も抜けた秋の雲

ここからが真剣勝負鉦叩

験担ぎ捨てて挑むや葉鶏頭

笑へ笑へまだ生きてゐる秋の雲

泣いて笑って今生きてゐる鳳仙花

慰めにも器用不器用赤まんま



## 齊藤裕子

九月十九日、サントリーホールで、大友直人指揮・東京交響楽団の管弦楽で、ブラームスのドイツレクイエムを歌った。病気で大きくなった下腹を腹帯で支えて、一時間余り立ちっぱなしのコーラスは、想像以上に大変だった。演奏が終わった時、歌いきった感動もさることながら、自分が病気を抱えながら、本番の舞台に立てたことに対する感動の方が大きかった。十一ヶ月間、週一で練習してきた苦勞が報われた瞬間だった。九月二十五日に最終診察も済んで、三十日入院、十月三日に手術を受けることになった。皆様に戴いた色紙の心温まるメッセージに励まされ、心を強くして、手術に臨んで参ります。又句会に参加できる事を目ざし、再会できる日を楽しみにしています。

## 連句「今朝の秋」の巻

今朝の秋挿木の薔薇に荅かな  
水澄める日のやはらかき風

尚子  
不寝

いよいよ三句目に入りました。連句は季節を大切にします。そしてもう一つ句の内容が

人情ありの句

自分のことを詠んだ句

|| 自の句

他社を詠んだ句

|| 他の句

自分と他者を詠んだ句

|| 自他半の句

人情なしの句で、景色や全く客体化された世相などを詠んだ句

|| 場の句

連句一卷をこのやうにわけます。編集から無記名の八句を渡されました。次回から膝送りですので今一度私の捌きで我慢してください。発句、脇句は場の句です。

月今宵父子の盃に影ゆれて

石動

この句は自他半の句です。揺れてゐる影は月影。前句とは爽やかな情でつながっております。

名月の古都の機町音消えて

石動

月代の果鴨銀座に灯は点いて

石動

望の月コンビニナートは寝ずにゐて

石動  
不寝

おもふよりつきの出の月大きくて

これらの句は場の句です。ここは人情の句を期待しましたので勿体ないのですが残念です。

月さやか振り向けばまだ手を振りて くら

この句は自他半です。前の句によつては恋の句にもなる雰囲気句です。

月明り見つめて手話の会話して

草

この句は自他半です。静かな情景です。ただ「見つめて」「手話」「会話」と云ふ語彙に表現の推敲があればと残念に思ひます。

見そなはず雨後の満月ふたりして

音々

この句も自他半です。前句よりも恋の句の雰囲気

が濃い句です。これからの恋の座が楽しみです。悩みましたが、「月さやか振り向けばまだ手を振りて」に決めました。

今朝の秋挿木の薔薇に荅かな

水澄める日のやはらかき風

尚子  
不寝

月さやか振り向けばまだ手を振りて くら

これからは脇と第三句の参加者と喜孝で順付け（膝送り）に作ってゆきます。順番は阿弥陀籤にでもしやうかと思ひます。

四句目から挙句の前までを平句といひます。平句では切字を使ひません。四句目は軽く作るのがよいと云はれてゐます。短句（七七）・雑（無季）・人情の句でおねがひします。連句でも俳句でも自転車乗りでも分つてから実行する派と、実行しつつ理解を深める派とありますが、自転車乗りだけは後者の方法でなければ乗ることはできないと思ひます。これからの参加者お待ちしてます。（喜孝）@y

あとがき

「獐回頭」もあと一回で終へる。堀内一郎さんの「わたくしの櫻を植ゑる雪の前」は先般の震災にあつた福島のお庭のことではないか？。一郎桜を見る機会があるであらうかとふとおもつた。わたしの中では毎年さかせることにしやう。山田ノブエさんは疎遠になつてゐたが、昔の俳句仲間。先日お亡くなりになられたとおききし驚いた。」新聞紙ひとひねりして刈田焼く」に往時を偲んだ。

じょうさんの「深し・深む・」の話は参考になつた。

何回も「ふかむ、ふかし」と唱へてみた。じょうさんは今月「秋深みかも水栓の漏れを直し」と詠まれてゐる。

「深み」も好きなことばである。文中にわたしが愛用してゐる『大辞典』がでてきた。わたしのは縮尺版で手相見のやうな大きな天眼鏡が付いてゐる。今は面倒なので余程のことがない限りご無沙汰である。

校正はさまざまな原因で間違へを起す。また同じ人に重なつてしまふことがある。故意と受取られ叱責を受

けることもある。今回はこの間違ひの重複を藤穂さんに起してしまつた。こちらの注意不足でご迷惑をおかけしました。ご寛恕を。

十一月の吟行は私の希望で東京タワー。ゆつくり句作と句会ができ充実した吟行であつた。因みに中食は全員そろつて創業寛政三年の「更級布屋」のざると天井のセット。次回はどこへ行くか楽しみである。 (喜孝)

二〇一三年十一月号

発行日	十一月二十日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090・9828・4244
ファックス	03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子  
表紙・佐藤喜孝

郵便振替 00130・655526 (あを発行所)  
会費 一〇〇〇〇円 (送料共)／一年

乱丁・落丁お取替えます。